

分布：全国

オモダカ (オモダカ 科)

サギタリア トリフォリア
学名: *Sagittaria trifolia*

面高、沢瀉 別名：ハナグワイ、イモグサ、クチアケ、クワイ、イモゴグサ、クワラツ

主な生育場所

水田やため池、湿地など流れのない水辺に生育し、流水中には見かけない。最も多く見られるのは水田や休耕田である。また、水深に対する適応性も高く、50cm程度の水深でも生育可能である。

特徴

種子と地下に産する塊茎によって繁殖する多年生。根元から伸びた長い柄の先に基部が左右に深く裂けるヤジリ型の葉を展開する。葉の幅は、細いものから、太いものまで変異が大きい。8月頃から花茎を伸ばし、径約1cmほどの白い3弁花を輪生する。また平行して、株の基部から地下茎をだし、その先端に塊茎を形成する。



イネ株の間で花をつけるオモダカ

名前の由来：ヤジリ型の葉の形や葉脈の模様を、人の顔(面)に見立て、長い葉柄を持った葉が水面上から高くでていることから「面高」。また、沢の水が流れ出る「瀉」に生えていたことから。

<農業との関係>

オモダカは塊茎形成とともに種子繁殖も行うため、厄介な水田雑草として扱われる。窒素吸収量が大きく、発生密度が高いと30%以上の水稻の減収をもたらすこともある。しかし、田植え後20~30日後以降に発生した個体は、水稻によって生育が抑制される。また、早期栽培では稲刈り後にも旺盛に塊茎を形成し、次年度以降の発生の拡大を助長してしまう。



特徴のあるヤジリ型の葉を展開

<生活史> 関東 地方の例(目安)



<類似種> オモダカ同様にヤジリ型の葉を伸ばす同属の絶滅危惧種アギナシも湿地やまれに水田に生育するが、オモダカのように地下茎を伸ばさず、株元に球状のむかごを形成すること、ヤジリ型の葉先が尖らずに點頭状になることが、区別点となる。

<一言うんちく>

オモダカの群生している様子は、ヤジリ型の葉から弓矢を立て並べたように見えたり、楯にも見えることから、尚武の「勝ち草」とか「將軍草」などと呼ばれる縁起の良い水草として、古来から武人の家紋として採用されてきました。毛利家の抱沢瀉(だきおもだか)などが有名です。



アギナシのむかご

<人との関わり合い>

正月に食するクワイ(慈姑)は、オモダカを由来とする中国からの改良変種で、径3~5cmの塊茎をつける。京都山城地方から大阪摂津地方にかけては、野生のオモダカを栽培して「吹田ぐわい」として、クワイと同様に塊茎を食用に利用している。オモダカの若葉も茹でて水にさらすと多少苦みがあるが食べられる。

また、乾燥させた塊茎には、利尿効果や鎮痛作用があり、めまい、耳鳴り、頭痛などにも効くとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語:夏】

村雨のふる江をよそに飛ぶ鷺のあとまで白きおもだかの花(草根集)

おもだかに寄る漣や余呉の湖(うみ) (内藤恵子) 沢瀉の花にくはへの銚子哉(嵐雪)

風わたる水のおもだか影見えて山さはがくれととぶほたるかな(香川景樹)